

秘
密

岡
本
俊
弥

ちょうど、中型トラック一台が通れるほどのトンネルだった。決して広くはないが、
圧迫感を感じるほど狭くもない。

そこにレールが敷かれ、牽引式の台車が停車している。二両連結で、先頭車には階段状の座席がある。壁側には手すりが付けられ屋根はない。

トンネルの傾斜は急だ。停車しているのは、斜面を登り下りするケーブルカーのようだった。子ども頃、ダムを見学するとき、岩盤をくりぬいた観光用のケーブルカーに乗った記憶が蘇った。

案内人と二人だけで乗り込む。がくんと衝撃がきたあと、ケーブルカーは動き始める。徐々に速度が上がっていく。

「地下二百メートルまで降下します」

*

「ご近所ですよね」

メールに書かれていた住所は、確かに八城の住む地方都市からさほど離れていなかった。

「どうです、取材できませんかねえ」

「取材か」

一瞬断ろうかと思った。取材の経験は少なかったからだ。だが、えり好みをする余裕はないと考え直した。やれるところから始めるほかない。

「ちよつと要領が分からないけど、まあやってみるよ」

「ああ、それじゃお願いします」

ほっとした様子だった。後輩からすれば、厄介ごとが二つ減ったことになる。

誰も手を出さない売れ残り案件と、やっかいな先輩の頼みごとの二つだ。

八城は役職定年を機に会社を辞めた。転職のあてはなく、年齢を考えると無謀な決断だった。

まあ、おれの勝手だけだな。

不安になると、そう考えて気を紛らした。

離婚した妻とは、最近連絡も取り合っていない。辞めたことは知らないだろう。子どもも両親もいない。要するに自分さえ食べればいいわけで、気兼ねする相手など一人もいないのだ。

しかし、年金までに十年以上の間がある。収入がゼロだと、あつという間に蓄えなどなくなる。遊んで暮らすわけには行かなかった。

八城は若いころ雑誌の仕事をしていた。別業種の会社に勤めだしてからも、断続的に原稿を引き受けたのだが、ここ十年近くは本業が忙しく疎遠になっていた。

当時の担当者は、退職したかもう現場を離れた役職クラスだ。辞めてすぐ後に上京して、何か仕事がないかを打診してみた。

なかば雑談混じりの会話をする中で、八城が仕事を求めていると分かると微妙な顔をされた。

「ずっと業界で仕事をされていたのなら、なんとか人脈でつなげたかも知れませんが、今から再参入は厳しいですよ。中高年ではどこの業界でも同じでしょうがね」

はつきりと言ってくれる知人もいたが、ほとんどは曖昧な返事でごまかされてしまう。八城の書けるような記事は、すでに若い書き手が何人もいる。雑誌の部数が縮小し、入り込む余地自体が減っていた。

調べてみると、ネット関係などで記事を書く場こそ増えていたが、単価は著しく下がっていた。記事一本百円とかでは、小遣い稼ぎにもならない。誰でも書ける時代では、よほどの知名度がないと生きていけないのだ。

コンビニバイトで月収十数万を凌ぐほうが、まだ現実的だった。

もうこれは無理そうだな、そう思いはじめたところに、取材の話が出てきた。後輩は、スマホの画面を見せながら言った。

「こういうサイトはご存じですか」

けばけばしい色使いで、素人がスナップで撮ったような写真で埋められていた。広告の合間に記事がある。

「ファクト系の超常現象を面白おかしく扱うサイトで、そこそこ人気があります」
「見たことないな」

「ここに売り込みがありましたね、自分では書けないから記者を寄越してくれと」
依頼者からのメールを開いて見せてくれた。

引き受けると聞いてから、後輩は簡単な説明をしてくれた。

「ふつう取材はしません。というか、サイトに記者はいませんからね。投稿系の体裁で誰でも書けるのです。編集サイトはフォーマットを見るくらいで、中身に関しては原則何もしない。真偽も確かめませんよ。面白ければ良い。読者投稿には稿料は出ません。でも、原稿料が出る依頼原稿もある。まあ素人だけではパターン化してしまいませんからね。こういうサイトなので金はかけられない。取材費は原稿料に込み、別には出ませんが、今回の取材源は金を要求してないので、もちろん謝礼など必要ありません」

旅費は出ないが、たまたま近くのお前なら持ち出しも許容範囲、という意味なのだろう。

最後に聞いた原稿料は、思ったほどではなかった。

*

九重流次郎氏（仮名）の住んでいるのは都市郊外の新興団地だった。周辺はもともと農家中心の田舎で、産業らしきものはない。都心に向かうJRの駅も、途中までは無人駅が続く。そんな駅の近くにある、古びた喫茶店で話を聞くことになった。日頃は常連のたまり場なのではないかと思われたが、他に客はいなかった。

「わたしはね、もともとこういうものにして」

変色し折れ曲がった名刺には、経産省の部署名が書かれていた。

「もっともこの肩書きは、今回のお話とは何の関係もありません。なぜかという、機密の職務だったからです」

予想したほど年配者ではなかった。記者(五十五才)より一回り年上という感じだ。頭は薄くなっていた。脂ぎった顔が気になった。そわそわと落ち着かない。服装はラフで汚れてこそいないが、裾が広がった着古しで色は褪せていた。

「この辺りの土地勘はおありでしょうか。一帯はもともと山林で、昔は谷筋まで狭隘ながら田圃でした。それが八〇年代から切り崩され、学術研究特別区になったのです。土地が建物で埋まり、完成したのがつい最近ですから、半世紀越しの大事業です。高度成長期の延長で作られた地方の工業団地などはたいがいがらですが、ここは空き地もなく隙間なく使われている」

九重氏は、記者の名刺を見ながらつぶやいた。

「ところで、閉鎖都市、秘密都市って言葉を聞かれたことはありませんか」

「ロシアにあったやつですか。名前ぐらいは」

「正確には、旧ソビエト連邦にあった都市ですが、まあいいでしょう。それが日本にもあるとしたら」

九重氏はそう言って、記者を睨みつけるように目を向けた。

*

編集部宛に来た九重からのメールには、要点がキャッチコピーのように書かれていた。

……日本には、公表されていない情報隔離都市が存在した

……そこでは、機密の軍事研究が行われてきた

……多額の国家予算がすぎ込まれ、特に年金予算を大きく棄損したとされるが、証券投資で粉飾されているため全貌は不明である

……重大な人身事故が発生したが、事実闇に葬られた

……関係者が亡くなる前に、真実のマスコミに対して国家的謀略の秘密を暴露する

「真実のマスコミってなんのことだ」

プリントアウトされたメールを見ながら、八城は後輩に向かって訊いた。

「既存のマスコミじゃない媒体、たとえばこのサイトです」

「ここはそもそもマスコミじゃないし、嘘八百のフェイクサイトじゃないか。どこが真実なんだ」

「この人もそうなのでしようが、投稿者や読者はいわゆるマスコミ、新聞とかテレビを信用していません。大半の人はね。でもね、新聞を読まないネット民には、陰謀系の記事に根強い人気がある。マスコミが語らない情報だからです。まあ疑わしい伝聞情報なんだから当然なんです。これなんか新顔なので、将来有望なんですよ」

「まだ徳川埋蔵金の方が根拠がありそうだが、これはなんとというか……」

「ありふれてないのがいんです。根拠なんてどうだっていい。本当らしく見せるのは、記事を書く八城さんの腕しだいですよ。馬鹿でも読めるように分かりやすく書いてください。大丈夫でしょ、八城さんなら、むかしからの実績も豊富にありますからね。P Vが伸びれば、同じネタの使いまわしができますよ」

そういうことか。

面白いかさうでないかは八城しだい。ようやく、後輩の意図が腑に落ちた。ただ、「むかし」は事実かもしれないが、暗に期待しないとされているようで、いい気はしなかった。

*

最初は日米貿易摩擦が始まりだったと、九重氏は背景を詳しく説明してくれた。

「日本とアメリカは同盟国なんですけどね、それはあくまでも日本がアメリカに危害を及ぼさない限り、という但し書きの下に認められた同盟関係なのです」

いかにも腹立たしい、という口ぶりで言った。

「一九五〇年代には早くも繊維摩擦が発生しました。格安ブラウスとか、衣類がアメリカの市場を荒らしたとかでね。六〇年代になると、テレビの安売りでダンピング訴訟を起こされ、鉄鋼もアメリカの産業に損害を与えたと輸出規制をかけられました。やつらは、日本をアメリカの屋台骨を食いあらすシロアリだと思っている。だから、

駆除に相当する紛争が頻発します。八〇年代は自動車、後半には半導体で日本が知的所有権を侵害した、不正輸出だ外国貿易法違反をしただと、まあ最近中国とやってるもめ事そのままが、日本相手に行われたわけですね」

戦後の日本がたどった道筋だった。

「世間はすぐに忘れてしまう。国際紛争なんて日常とは関係ないですから。駆除が有効に働いて、そのあと日本は凋落、もはや競争相手ではなくなりました」

話を戻しましょう、と九重氏は続けた。

「つまり、出る杭は打たれたのですよ。いまの中国との唯一の違いは、当時の日本には報復手段がなかったことです。軍事的にも経済的にも、日本が頼れる国は、広い世界の中でアメリカしかいない。だから楯突くわけにはいかない、言われるがままです。しかし、政府が補助する将来的な先端科学にまでクレームがつき始めると、さすがにこのままでは拙いと思う関係者が出てきた」

はじめは小声だったが、後になるほど声が大きくなった。興奮気味だった。

「表の見えるところに出すと規制のネタにされる。だったら地下に潜らせよう、とこ

うなるわけです」

こうして、アメリカから隠されたプロジェクトが始まった。しかし、日本の官僚が考えるには、奇抜すぎるアイデアだ。

「そこで、さきほどの秘密都市の話に戻ります。そもそも、秘密都市が何だったかご存じですか」

九重氏は問いを投げてきた。

一般的には核開発の拠点だったとされる。核廃棄物をずさんに管理して、漏洩事故を発生させたこともある。

「まあだいたいの認識は、そういうネガティブな面になる」

記者があいまいに答えると、九重氏は口をゆがめた。

「ソビエトは崩壊した国だから、滅茶苦茶ででたらめだったと思っている人が多いでしょうね。だが、こと兵器に関わる科学技術については合理的な考え方を持っていた。

選択と集中を徹底していた。大学と科学アカデミー、大規模な研究所と役割分担を明確にして重複をなくし、例えば原子力に関しては十二の研究施設と十の秘密都市に集

中させていたのですね。秘密都市は、いわば実務を行う軍事工場のような役割でした。都市には名前がなく郵便番号で呼ばれていて、アルザマス16とかトムスク7、チェリヤビンスク65とかね」

つかの間、九重氏は口をつぐんだ。

「ソビエト連邦が崩壊したのは一九九一年です。前後の政治不在で国内は混乱し経済もぼろぼろ、秘密都市のエリート職員ですら給与がもらえなくなりました。主要な技術者の国外流出が取りざたされたのはこの頃ですね。北朝鮮が科学者をリクルートする未遂事件が話題になった。さすがに核疑惑国は拙いが、西側の国なら多少緩いところもある。極秘裏で、われわれはあるグループを受け入れたのです」

受け入れたとは、どういう意味だろう。

「日本で極秘研究を進めるためのノウハウを持つメンバーに、特別在留許可を与えたのですよ」

日本に住んでいるのか。

「それなりの数ですが何千人というほどの単位ではないし、都市の内部なので秘密が

保たれます」

都市となると小さくはない。日本に秘密が保てる場所があるのか。

九重氏はぼそりと言った。

「この近くにあるのです」

そこで記者は、都市と九重氏とのかかわりを確認してみた。

急に視線が定まらなくなる。

「……わたしですか、わたしは単なる使い走りです。何の権限も持っていなかった」
しかし、秘密都市に行ったことはある。

「ええ、何度も、いや何百回も」

九重氏が最初に上司から辞令を受けたとき、都市の詳細を知らされなかったという。仕事は、審議会と現地研究所をつなぐ連絡係だった。都市と外部との通信手段は厳しく制限されていた。

キャリアでもない自分に、なぜそんな役割が回ってきたのか。

「だいぶ後になって分かったのですが、それが異動や昇格の袋小路だからです」

学研都市では国や半民半官の研究機関の施設が、すでにいくつか出来上がっていた。周囲には大規模な宅地が造成され、谷間のいくつもあった山林は大きく埋め立てられ、更地に変わっていた。

ゲートはそんな施設の一つに設けられていた。

何の変哲もないビルの地下に、二階分が吹き抜けとなったフロアがある。警備員が立哨していて許可者以外出入りできない。民間会社の制服を着ていたが、実は公安関係の出向者なのだ。

その先に、地下へと下るケーブルの駅がある。

九重氏は一人で、ケーブルカーに乗り込んだ。運転席に警備員がいて、黙って座席に着くのを見守った。お目付役で運転手ではない。

時計は見なかったが、終着点までの降下には結構時間がかかった。二百メートルとなると、ビルの五〇階分ぐらいにはなる。

薄暗いトンネルの中を下り、やがて最下層に達した。

そこには別の警備員が立っている。いや、警備員ではなく自衛隊の制服を着ていた。

「ここからはわたしがご案内します」

隊員に導かれるまま、地上のビルの廊下と言われても違和感のない長い通路を歩いた。

「想像したものと違いましたか」

「ああ、いやイメージが湧かなくて」

自衛官は、短く笑い声を上げた。

「まあそうでしょう。わたしも想像できなかつた」

突き当たりは自動ドアになっていた。

ドアを抜けるとテラスがある。そして、テラスの手すり越しに地下都市が広がっていた。

大きな柱に遮られながら、高さ十メートルほどの吹き抜けになっていた。

「このちょうど上に自衛隊の施設があります」

「そうなんですか。来る途中の道からは、全く見えませんでした」

「門はあるのですが、大きな看板もないし滑走路や兵舎もありません。森に覆われて

いますからね」

「どういう施設なのですか」

「弾薬支処です。まあ弾薬庫ですよ。だから国もその地下を秘密に利用することができたのです。施設の更新を名目にすれば、秘密が多くても当然視される。少なくとも施工した業者はそう思っているでしょう。掘り出した大量の土砂はニュータウン造成に使われ、工事の規模が世間で騒がれることもなかった」

「弾薬庫があるのですか」

「もともと掩蔽された施設なので、外からでは分かりません」

爆弾や銃弾の下にある地下都市なのか、なんだか落ち着かない。

気温は地上より低く、九重氏はさむけを感じたという。

地下は区画に分けられていた。不思議なことに建物は統一されておらず、床から地下の天井までさまざま形状で階層が埋められていた。通りの上には建物間を結ぶ空中歩廊が設けられている。ガラス張りの通路には何人かの人影がある。視界の奥に行くほど、都市は掘り下げられている。どの街路も緩やかな傾斜がついていた。ガス灯

風にデザインされた街灯が灯り、外国の夜景のようにも見えた。

その一つの建物で九重氏はロシア人のユーリ・ジェーシッチ(仮名)に紹介された。研究所長だった。ジェーシッチはにこやかに笑いながら、体を抱きかかえるロシア風の挨拶で歓迎した。

「わたくしも研究者なのですが、優秀ではありませんでした。たまたま日本語が少しできたため、責任者を任じられただけなのです」

科学者の集団といっても、コーディネータの役割を果たす者が必要になる。国家の中枢機関との調整や、予算の確保などプロデューサー役をジェーシッチは担当していたようだった。

ソ連にノウハウがある研究ということは具体的には何か。

記者は話の途中で質問を入れた。

「核……正確には、核と弾道兵器の技術ということに」

予想できたとはいえ、驚きの答えだった。日本で核開発をするなんて信じられない。拒否感が今よりずっと強い二〇世紀にである。世間に知れたらただでは済まないだろう

う。

「開発をしたのはロシア人です、日本人じゃない。われわれは建前上何も知らないのです」

招聘しておいて、大規模な施設まで用意して、その答えはおかしい。

「まだバブルの余韻がありましたからね。国に予算はあったし、開発案件が減り始めたゼネコンは、規模を維持するためにどんな仕事でも受けた」

要点をはぐらかすような説明だった。

「分かっていますよ。ただね、問い詰めるのは自由ですが、どちらにしてもわたしがお話しできる内容ではありません」

誰が決めていたのかという質問に対しては、

「当時の通産省、文部省、公安調査庁、防衛庁などの限られたメンバーからなる国家戦略特別審議会です」

総理とか閣僚とか、政治家は関与しなかったのか。

「政権が関与しないはずはないと思いますが、日和見の政治家は排除されたのかもしれない」

れません。何れにしても、誰も憶えていないと答えるでしょうね」

九重氏はとぼけて見せた。

「ソビエト時代のロケット計画は、エネルギーもブランもすべてご破算になった。ここで研究が継続できるのであれば歓迎すべきことです」

そう感謝しながらも、ジェーシッチはソビエトがロシアになってからの待遇悪化と、何より社会的地位の喪失を嘆いていた。

日本での給与水準は破格に高いはずだが、所詮だれも知らない「無」の存在ではない。不満は残るだろう。しかし、いまさら何が言えるのか。職位の低い相手に、愚痴を垂れ流していただけかもしれない。

研究所は一つだけではなかった。

ジェーシッチは日本人のキーマン多々良寿一（仮名）を紹介してくれた。

ハードで固めたロシア側と対照的に、日本側はソフト的な研究開発が多かった。多々良は、人工知能に最適化された新世代コンピュータのプロジェクターだった。しばらく前まで、シンポジウムで頻繁に講演する姿を見かけた大学教授だった。研究

室には、独自に組上げられた人工知能言語を高速実行する専用マシンが数十台も並んでいた。

「もう地上の研究機関は辞めました。ここなら研究に打ち込める」

まだ四十代の若いリーダーは、和やかに笑って握手をした。口端だけの笑いで、目は冷めていた。

人工知能のような将来研究であっても、政府資金が入るのであれば公正な競争を阻害するとクレームが付き、表の研究は下火になっていたので。

パソコンやマイクロコンピュータから大型機までカバーする、国産OSチームが働いていた。さまざまなパソコンの上で、国産OSの動作テストがされていた。アメリカから、非関税障壁の一つに挙げられたグループだった。急激に広まりつつあったアメリカ製OSの邪魔になったのだ。

「このままでは、ごく限定された小さな応用でしか使えなくなります。だからここに来た。できるだけ早く、LSI開発の設備導入が必要ですね」

さまざまな媒体で活躍していた、気鋭の研究者は吐き捨てるように言った。

唯一のハードといえるのは、常温で無限のエネルギーを生み出す核融合プロジェクトだった。日本勢の中で、一番大きな研究スペースが割り当てられていた。常温核融合は、実証実験の結果が疑わしいという悪い噂が付いて回っていた。

「表ではさんざん批判されてきましたが、不正などありませんよ。原子力といえども国外の再処理工場が不可欠だ。わが国のエネルギー自立手段はこれしかありません」
ぎらぎらした目つきの研究者だった。

「あのときはふつうに思えたのですが、彼らの表情には共通点がありました。強い怨念というか、恨みです」

しかし、研究者たちはだれもがエリートだった。ロシア人は最優先の国家プロジェクトの要員だし、日本のプロジェクトも国の補助金が潤沢に使えた。ある意味、好い目もみてきたはずなのだ。

「まあものごとには両面がありますからね。表と裏、光と影、良いことと悪いこと。でも、人は両方あるとは考えない」

九重氏は分かったようなことをつぶやいた。

そんなすごい秘密研究の噂すら出ないのはなぜなのか。

「うん、まあそこですね。まず核については、これを公表して抑止力にできたのはインド、パキスタンまでです。後はリビア、北朝鮮、イランと叩かれるだけだ。イスラエル式の黙って保有を匂わせるやり方も、周りが比較的弱い国だからできる。日本では難しい。方針決定をずるずる先延ばしにして、ただ嚴重に秘匿するだけになる」

二一世紀になると、予算の確保が難しくなってきた。組織を隠匿する目的で、複雑な資金ルートを通してしているせいだった。高級官僚は数年で部署が変わる。この件は正式文書が残せない口頭伝承なので、だんだんと情報が曖昧になっていった。自由に入りできない秘密都市など、存在自体が怪しまれるありさまだった。

ある日、九重氏はジェーシツチと多々良に呼び出された。その頃には、秘密都市の研究所はすべて統合され、一つの戦略プロジェクトになっていた。プロジェクトを事実上率いていたのは、もはや日本政府ではなく現場のリーダーだった。

「このまま行くと近い将来開発は止まります」

多々良は深刻な顔でそう言った。

「そこで、われわれの存在価値を明確化するためにも、技術を結集した成果をご披露したいと考えまして」

ジェーシツチは笑顔で続けた。

「発表会でもするのですか。でも見せるといっても」

「一般人に見せるわけではありません。特定の層、特にアメリカにアピールするので」

「アメリカにですか、それはしかし」

「どうせ奴らは気がつくでしょう。そうなってからでは遅いのです」

「公表するとなると、……許可が必要です」

「誰が許可してくれますか」

「それは……」

「審議会は機能しているのでしょいか」

「……現在の審議会は名目だけで、集まって審議した実績はここ数年……」

「ほらね、責任を取らないのが官僚なのです。われわれのもとの組織がそうだっ

た」

「だから、ここにいる当事者だけでやりましょう」

「九重さんも事後報告でお願いします。悪いようにはしません」

二人が喋って決めていく様子を、九重氏は聞いているだけだったという。何が行われるのか見当もつかなかった。

結果的に事態を甘く見ていた。

「地上に近いところに大きな格納庫がありました。もともと弾薬庫のスペースなのでしょう。そこにロケットエンジンを試験するブースが設けられていた。爆発の危険があるし、有毒ガスも扱うのでふつう地上にあるものです。しかし、プロジェクトの秘密性もあって、地下にありました。」

そこにロケットが組み上げられていたのです。ロシアのエネルギーロケットには史上最高の性能がありました。今はもうない。そのエンジンを部品単位で確保しました。多段式の大型ロケットです。加えてブランがあった。往還型宇宙機です。当時はスペースシャトルの物真似だとさんざん揶揄されたブランですが、似ているのは外観

だけで中身は別物でした。バイコンヌールで瓦礫に埋もれる前に、数機分を分解入手したのです。当時も初歩的なコンピュータで、大気圏突入から着陸まで完全な自動操縦ができました。今回は日本の人工知能ソフトと国産OSで、極めて高性能にバージョンアップされています。世界のどこにもないOSですから、誰にもハッキングはできない。

何のためのブランかという点、宇宙空間に設けられた核の要塞です。核弾頭を複数発搭載することができた。弾頭はさすがに研究所で一から作るわけには行かない。しかし、設立当時の混乱期にロシアから数十発を入手することができたのです。再整備する技術は、ロシア人お得意の分野です。

どうするのか、というとブランを宇宙に打ち上げ地球周回軌道に乗せる。格納庫を開いて、ミサイルを展開し、アメリカに照準を合わせる。絶滅戦争を仕掛けるのではないから、何百万人単位で殺せばよい。少なくとも数年間衛星軌道で活動するため、常温核融合ユニットを搭載しています。無人ですから無駄な有人スペースは必要ない。これが成功すれば、ただちに二号機三号機が発射される。三機体制で宇宙を遊

弋し、迎撃などの疑わしい動きがあれば、人工知能が直ちに先制核攻撃をする。

もともとスペースシャトルも、アメリカのSDI、スター・ウォーズ計画では同じ役割を担うものでした。少なくともソビエトはそう思っていた。どうですか、三〇年遅れで、アメリカの恫喝に対する恫喝返しが完成するのです。北朝鮮も真っ青ですよ。そう、三機には名前がついてましてね、ヤマト、ムサシ、シナノです」

*

「八城さん、ここんどこちよつと飛躍しすぎでは」

後輩がチャットで呼びかけてきた。

「いくらなんでも、予算逼迫の話から急に核要塞では飛びすぎではないかと」

「そうかな、ドラマチックでいいだろ」

「読み手がついていけないじゃ。政治的な陰謀系かと思ったら、いきなり軍事オタク系となるとジャンルが違いますからね」

「でもなあ、ソ連の核技術者を受け入れたんだから、むしろ必然じゃないか」

「最初から兵器開発だったとするわけですか」

「いや、日本側は何も決めていなかったのだろう。何もという用語があるけど、途中から放置された。長規ビジョンがないからな。それでロシア人も日本人研究者も、当初の研究目標を完成させようとした。別のことができる才覚があるのなら、あんな都市にはいかなかったろう」

「年金予算を食いつぶしたあげく、方針なしで暴走したわけですね。まあ、そういうストーリーならいいかもしれません。でも脅すだけだと地味じゃないですかね。何か派手な立ち回りが欲しい展開ですよね」

後輩は、独り言のようなコメントを残して会話を終えた。

*

「ロケットの組み立てはロシア式に横倒しで行われたのですが、打ち上げるとなると

垂直に立てて外に出さないといけません。この格納庫は真上に可動式の屋根があつて、それを引き開けると打ち上げポイントとなるよう工夫されていました。

しかし、発射すればどの国でも探知できます。その瞬間から秘密は保てなくなります。つまり失敗はできない。一回きりのチャンスなのです」

成功したとして、その後どうするつもりだったのか。

「何か要求をだしたかもしれません。ただ、彼らには取引などできなかつたでしょう。国家が相手でなければ、アメリカが黙って屈服するはずがないからです。全力で撃墜しようとする。核攻撃をとまなう戦闘に陥る可能性が高かつた。結局、彼らは軍人でもなければ政治家でもないのです、技術開発に対するプランはあつても、将来展望はなかつたのです。どちらにせよ続かなかつたと思います」

ということは失敗したのか。

記者の質問に対して、九重氏は苦笑のような表情を浮かべた。

「日本から未知のロケットが打ち上げられたなんて、どこかで報道がありましたか。ないでしょう。打ち上げはなかつたのです」

では秘密都市はいまどうなっているのか。

「その前に、ロケットの燃料に何が使われるかご存知ですか。いやわたしも知らなかったのですが、さまざまな組み合わせが使われるようです。液体酸素と液体水素、液体酸素と灯油系のケロシンやLNGなどもある。われわれのロケットではヒドラジンが使われました。ソ連が得意としていた燃料です。たいへん扱いにくいですが、使用法を誤らなければ保存がしやすい。ただ、問題があった。人体に対する毒性です。漏れれば大変なことになる。特に秘密都市の上にある基地の周辺は住宅街でしたからね。そうはいつでも、他の方式に切り替えられるだけの資金も時間もなかった」

発射の準備は着々と整っていった。

宇宙機ヤマトを積んだロケットは垂直に立ち上げられ、開閉式の天井の下に移動した。燃料注入開始を待ただけだった。燃料は一度に搬入できないため、何度かに分けて防蝕処理された備蓄タンクに蓄えられていた。

この施設の管轄は、本来なら防衛省のはずだが、指揮系統が曖昧なまま秘密都市が管理していた。警備員はごく少数しかいないし、何を守っているのかも理解していな

い。ずさんな防備体制だったのだ。

注入開始の前日夜、燃料タンクの下層部で小さな爆発が起きた。タンクに穴が開き、少量の燃料が漏れだした。発射準備を急いでいた研究チームから、メンテナンス要員が防護服とマスクを着けて現場に走る。

だが、行きつくことはできなかった。その手前で次々と倒れて動かなくなったのだ。

その後、火災が発生する。消火設備や警報機が作動しない。火炎は大きくなり、やがて大爆発が発生、次々と誘爆を起こしながら燃料タンク全体の火災へと拡大していく。

ロケットは倒壊し、艀装を進めていたムサシ、シナノを含めて火に吞まれていった。

格納庫自体は爆撃に耐える防爆構造だったため崩壊こそ免れたが、その分密閉された内部は一切が高熱で焼灼された。

漏れ出した猛毒のガスは地下へと汚染を広げていく。遮蔽されているはずの扉を抜けて、最下層の居住研究施設まで浸透する。居住区は深夜時間帯で、多くの研究者や家族は寝静まっている。火災警報は鳴らない。呼吸に苦しみ胸を押さえながら、研究員の多くは悶え死ぬ。生存者なし。約千人の人間が亡くなったものと思われる。

「ええ、そうですよ。わたしが仕掛けたのです」

九重氏は淡々と語った。

「備品の防護マスクはガスに有効なものではなかったですし、通常閉じられている地下都市の防火、保安扉も、開かれています。何より、火災などの非常時に動作する緊急換気システムが働かなかった。逆に有毒な空気を都市内部に循環させました。そういうった工作はわたしが手引きして、外部の工作員が実行しました。もちろん独断ではありません。細かな指示にいちいち従いました。誰がやらせたのかは、ご推察してください。そう、やつらはお見通しだったのです。」

工作員は外人だったか。いや、日本人でした。階級章も部隊のマークもなにもない真っ黒の戦闘服を着て、一言も話は交わりませんでした。自衛隊も警備員も、姿を見せません。彼らは知っていたのでしょうか。

はじめから。いえ、そうではありません。接触を受け、報酬を示され、弱みを握られ、脅された結果です。単なる使い走りですので、どうしようもありませんでした。終わった後の現場も見えていません。工作を終えたあと、直ちにわたしは公務を辞めた

のです。まあそこまで筋書き通りです。

都市がどうなったか。格納庫は火災で中のものすべてが焼失しました。都市は人だけを排除して研究成果を没収する予定だったのですが、火災が発生してやむをえず水没させました。近くに大きな川があって、取水していたのです。核は搬出されましたが、格納庫にあったものはどうなったか分かりません。汚染がひどくて行けないと聞きました。密閉され、二度と開けられることはないでしょう。ええ、ジェーシツチも多々良も亡くなりましたとも、おそろくね」

ではなぜいまここで告白したのか。

「最近、わたしは誰かにつけられるようになったのです。誰かは知らない。以前話のあった工作関係者とは連絡が取れません。たぶんもう時間がないのですよ。だからお話ししたのです」

九重氏の主張するような大火災があったのなら、外部にも目撃者がいたのではないか。記者は当時の新聞やテレビ局のアーカイヴを調査してみた。

すると、確かに自衛隊基地で山林火災があったことが、地方版の小さな記事になっ

ている。死傷者の情報は無い。不思議なのは写真や動画が一枚も残されておらず、さらに奇妙なのはSNSのどこにも記録が残っていないことだ。

これは何者かの事件介入を意味しているのだろうか。謎は深まるばかりである。